配りました。汗をかきかき足で稼ぎました。体力がなければ、かなわないと思いましたし、こんなに応援してもらっているので絶対負けられないと思いました。9月23日の選挙結果は丸山さん1198票・私は1060票で、二人とも上位当選でした。

議会では、女性だから話しやすいと細かな要求が寄せられます。それらをみんな一般質問で取り上げてきました。障がい者のタクシー券を「のれんす号」（300円の乗り合いタクシー）で使えるように、中条中学校に武道場を建ててほしい等です。

今の私の原動力は、麻雀だったりオカリナだったりです。振り返ると、信心深い母に感謝を教えられましたし、父からは絶対に譲らない正義感を教わりました。友人からは「あらっと思う輝きが大事」「運動の素晴らしさ」「おしゃれの大切さ」「けちはダメ」「守りの生活はつまらない」など多くを学びました。これからも、謙虚に挑戦し続けたいと思います。

（はたの たかこ・共産党胎内市議会議員）

教員人生を振り返って

関口 勝

一 はじめに

私は二〇一八年度末をもって定年退職となる。この人生の節目を迎え、今までの教員生活を振り返り、感じたこと、後輩に伝えたいことなどをいくつか述べてみたい。

二 長野県で中学浪人を相手に

埼玉県の教員養成大学を卒業したが、教員採用試験に不合格となり、いったんふるさと上越市に戻る。このころ、中学、高校での教員採用試験は厳しい世界であったので、小学校の教員免許を通信教育で取得した。しばらく学習塾などで仕事をしていたが、やはり採用試験の壁を突破できず、二十五才から縁あっ

て長野県の大手学習塾に就職した。

長野県での初仕事は、中学浪人だけの学習塾での理科指導だった。その当時は長野市周辺だけでも中学浪人が百人以上いたと記憶している。それを二クラスに分けて午前中二時間の授業、午後はその学習塾のいろいろな教材作りという毎日であった。

三　私立高校での三年間

二十六才で結婚し、二十七才からは学習塾の系列の私立高校に転勤となった。新潟県もそうであったが、三十年以上前の私立高校は、県立高校を不合格になった子が集められるような学校であった。そのころ若林繁太さんの篠ノ井旭高校での実践「教育は死なず」が評判になっていたころで、私も情熱に燃えて授業に取り組んだが、「つっぱり」全盛期の私立高校での教員生活は苦しみの方が多かったと記憶している。

まったくの素人であったが、軟式庭球部の顧問もやり、生徒と炎天下で真っ黒になって練習した。ある大会で良い成績を収め、次の大会へ出場したが、その大会参加の道中で生徒が列車の不正乗車で補導され、泣く泣く大会参加を辞退して帰ってきたことがあった。まさにテレビドラマのようなストーリーであり、真面目に取り組んできた生徒の大会出場も奪ってしまったことを悔いた。せめてもの救いは、その後も生徒たちは全員練習を再開してくれたことであった。

四　中学校での二年間の講師生活

長野県での十年間の生活の間も新潟県や長野県の教員採用試験を受け続けるも合格できなかった。最近は、教員採用試験の公平性、透明性が向上してきているが、昔は学生時代に学生運動の中心的メンバーだった学生が高い確率で不合格となることが多い時代であった。私も大いにその疑念を抱いていたが、とにかくペーパーテストでは文句のない点数を取れるように、仕事をしながら勉強した。

少しでも採用試験に有利になるようにと、

長野県の公立中学校講師に転職した。身分は市町村費負担教職員で、正規の定数内教員のほかに、市町村独自で給料を出して雇用される身分であった。とにかく安い給料であり、平成元年ころ月十万円程度で賞与なしであった。そのころ妻は長野県の正規の教員であったが、育児休暇中の妻と就学前の子どもを二人養う生活は苦しかった。世はバブル全盛期であったが、我が家ではいったい何のことだか分からなかった。

講師の身分なので、授業さえ行えば定時に帰っていいはずであった。しかし、部活も担当し研究授業もやらされることなっていた。休日の練習試合の引率業務も時間外勤務も、ほかの先生方と一緒であった。ただ、身分は講師であったが、先生方も保護者も、同僚として一人の教員として扱ってもらえたことはよかったし、その当時の校長からも、理科指導について丁寧に教えていただいたことを覚えている。

特に私の理科の研究授業に、他の教科の先生も一所懸命援助してくれる校内研究体制は素晴らしいと感じた。この点、新潟県内の中学校の授業研究体制は、各教科任せになりがちだという話をよく聞く。最近の少子化で、中学校の各教科別教員の数は、一人か二人が多いので、なおさら教員同士の学び合いがしにくいであろう。新潟県の中・高等学校の課題である。

五　新潟県小学校教員として

三十三才にしてやっと新潟県の小学校教員として採用された。周りの同年代の同僚は、すでに小学校教員としての経験を積み、学習指導では中心的な仕事をこなしていたが、私は初めて小学校教員としてスタートしたばかりであった。何をやるにも時間がかかるし、本格的な学級担任としての仕事にも悩んだ時期であった。学生時代の将来の夢は、中学校理科の教員であったので、小学校の理科以外の教科指導にも苦心した。

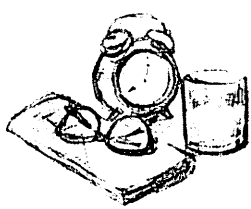
ただ、小学校教員として仕事を続ける中で、

教科の専門性はやはり大切だということも分かってきた。「あの先生の理科の授業は楽しい」となれば、他の教科も子どもたちはまあまあ付いてきてくれるのである。

また、いくつかの学校を渡り歩き、学級崩壊に近いクラスの担任になることもしばしばあった。学級崩壊状態をあっという間に立て直すスーパーティーチャーもいることは確かであるが、私の力不足で一年で立て直すことは残念ながらできなかった。

教員生活の終盤では、級外で理科指導を担当することが多かった。話術や強烈なキャラクターで子どもをリードしていくという能力を持たない私であったが、その代わりに、理科指導を通して教材や事物、現象で子どもを引き付け、教材を通して子どもに語り掛けることの面白さに気付くことができた。

六　最後に

新潟県の教員人事は、小・中・高の交流はほとんどない。しかし私は、十年も教員採用試験の壁に阻まれたおかげで、小・中・高、そして中学浪人、大学浪人と、切れ目なく児童生徒を相手に授業を行うことができたことは、不幸中の幸いで、普通の先生にはなかなか経験できない教員人生であった。小学校では、児童の五年後、十年後のことを考えて接することはとても大切だと思う。教員免許があるならば、小中高の教員の人事交流をもっと盛んにすべきだと思う。

（せきぐち　まさる　小学校教員）